秋の奥音水植物採集記

（県下主要植物採集地案内作成ノート）

岩　谷　成　彦

採集記録

1963年11月16日、9時15分寒霞渓の谷を少しみて音水口バス停留所につく。一行は、室井、岡村、近藤、岩本、杉山、若山氏等との7人。

「音水深林県立自然公園」の石碑がある。引原ダムへの道と分れ、引原川の方におりてゆく。ネササ、トラノヲシダ、コオニツユクサ。橋の手前左岸の大きな岩にビロウドシダが一杯ついている。

橋を渡る時、下を見るとイワナが泳いでいるのが見える。「釣竿をもってくればよかった」と誰かが言ったら「青酸カリをほりこむ方が早い」と誰かが物騒なことを言った。その人の名は不明。

田代善太郎氏の論文によると、音水をふくむこの奥谷国有林中には、ヤブツバキが見られないとのことだが、この橋の両岸にあった。

橋を渡ると色づいたアカシデの大木がある。墓地に植えてあるシキミも大きい。ウリカエデ、ミツデカエデ、アオイスミレがみられる。

道は引原川に入る音水本谷の谷川と平行している。対岸チユウゴクエノキが美しく紅葉している。その後の黒々としたスギの植林について、室井先生「生長力の盛んなスギの木は先端が尖って見え、生長の止ったスギの木は先端が円く見える」この説明を聞いて杉山老人「人間も円くなると生長がとまる。大いに毒舌を吐いて長生しよう」と、大張切り。オニグルミ、コナラ、モウソウチクの林。オタカラコウのものすごく大きいのがみえる。

まもなく8戸ばかりの音水の部落に入る。石垣に、オノマンネングサ、クサノオウ、カラムシ、マダケ、釣竿の先に使うのに最もよいと言われるホテイチクがある。ケヤキの大木、ウラジロガシの下をとおり、9時45分、営林署の事務所前につく。赤西口と中音水の谷からの山林軌道が右岸より来て事務所の前で終っている。

営林署の宿舎と人家の間の細い道を川と平行して進むと野菜や桑の畠が少しある。このあたり、イラクサが多い。イワガラミ、オオツヅラフジ、コウモリカズラ、メナモミ、ヤマヤブソテツ、イヌシダ、ネムノキ。

橋を渡り右岸を進む。大きな岩にコタニワタリが着いている。スギ林の中に、チドリノキ、フサザクラ、シオジ、クマノミズキ、キハダが紅葉している。ヤマブドウの紅葉は特に美しい。木の下には、オオバノハチジョウシダ、イワガネソウ、ツヤナシイノデ、ジュウモンジシダ、ギンバイソウ、サイハイラン、オオバミゾソバ、シャガがある。エイザンスミレが非常に大きい。また、岩にダイモンジソウがついており、少し進むと、このあたりよりコケと思えぬ程大きいコウヤノマンネングサが沢山出てくる。右、川の中は大きな岩がゴロゴロしているが水は少ない。対岸の岩にイワタバコがついているのが見える。

橋を渡り左岸を進む。イタヤカエデ、カツラの大木、イヌシデ、フユイチゴ、ハイイヌガヤが出てくる。

やがて明るい広場に出る。この谷の水を引原ダムへ送る取り入れ口がある。テンニンソウ、ミツバフウロ、ニシノイヌヤマハツカ、イノコズチ、キカラスウリ、カラムシ。

10時10分頃、取り入れ口の横をとおり、大きな岩につけられた掛け橋を渡りスギ、ヒノキの林の中を進む。川は水量が多くなり、大小の岩の間を流れる水は、さまざまにわれ、また小さな滝となったりしている。ヤマアサクラザンショウ、ムラサキシキブ、ミヤマシキミ、ヤマアジサイやツヤナシイノデ、オシダの大きな株、リョウメンシダ、ヌリワラビ、エビネ、ヤマアイ、ミヤマイラクサ、ムカゴイラクサ、サルナシ、ミヤマトウバナ。

ヤマノイモのほり跡が2、3カ所ある。

このあたりより少しの間ヤマクワの林が続く。大部分葉は落ちている。フシグロセンノウ、ナキリスゲ、ヤマルリソウ、マタタビ。

対岸を見ると、紅葉の最盛期もすんだので葉の落ちた木も多いが、コナラの大木が1本特にあざやかに色づいているのが見える。色々な紅葉の中で特に真赤な紅葉はハウチハカエデ、それらの中で、かたまってさらに赤く見えるのはイロハカエデで、それを一層ひきたてているのはスギ、モミの黒々とした緑色である。

ヤマグワにかわって、メダラ、アワブキ、ミズキ、エゴノキ、ミヤマハハソ等がふえ、クリやオニグルミの大木、ブナ、ミズナラ、メグスリノキ、カナクギノキ等の林となる。下にはハイイヌガヤ、チヤボガヤが多くなる。左下で大きな水音がする。「双竜の滝」と福崎山の会がつけた木札がある。このあたりヒロハヤブソテツが

多い。

双竜の滝への道はないが、このあたりより下ると、谷川が巨岩のため双流となった滝につく。この滝には、滝の裏側に10人位の人が入れる広場があって、裏見の滝ともなっているそうである。

落葉樹林の中を進むと、ミヤマフユイチゴが多くなる。オオバクロモジ、イイギリ、ウリノキやヒナスミレ、ザゼンソウが出てくる。

10時50分、少し広くなった河原に出る。左岸のカツラの大木には、ビロウドシダ、オシャグジデンダ、サワダツ等がついている。

流れを飛び越え右岸に渡ると、タニグワの大木が斜めに生えており、これにアオネカズラ、十文字シダ、コタニワタリ、ハバビロスゲが着いている。トチノキ、メグスリノキ、ヨグソミネバリ、ナガバヤマグルマ、ミカエリソウ、スミレサイシン等を見ながらゆくと左側に大きな岩が道にのしかかるように立っている。

これに、イワウチワ、ツルデンダ、カタヒバ、コケシノブ等が一杯ついている。

右、谷川は、巨岩にせきとめられて、第2の滝となっている。右岸をまく道はかなり急坂である。ヤマシバカエデ、アキギリ、ボタンネコノメソウ、ウワバミソウ、リョウメンシダ。

登りきると道は河原に向って少し下りとなる。ヤマグルマ、タイワンコナラ、クマノミズキ、ウリノキ、コバノミツバツツジがあり、またヤマヤブソテツ、イワウチワが見事な大群落をなしている。

11時10分、丸木橋を渡り河原に出る。少し早いが昼食をとる。

紅葉見物の家族づれや団体は、さらに奥へと進んでゆく。この奥の方では、道は川と分れ原始林の下ササ原の中を登ってゆき、平坦になった所で、また川に沿う。川は滑滝が5、6段つづき、さらに奥の方へと続いている。

この谷、このあたりまではヤネフキササばかりでネマガリダケはなかった。

昼食後、藤本先生が営林署の人から聞いた「紅葉が今年は1カ月ばかり早かったので葉が落ちた木が多かった」という話から、室井先生より「カエデとモミジの区別や如何」という話が出た。いずれも一言居士ばかりなので色々な説が出ていたが「裂片が3～5で広く黄色に紅葉するのがカエデで、5～7片に裂片が深く細く切れこみ赤く紅葉するのがモミジである」という室井説におしきられた。諸先生方は如何。

この河原の上流、対岸は崖となっている。昼食後に行き、次のものをみた。

イワタバコ、イワウチワ、ダイモンジソウ、スミレサイシン、コチャルメルソウ、ヤマアジサイ、ユリワサビ、コシヨウノキ、キハダ、ヤマヤブソテツ、ヤマイタチシダ、シラクチズル、の太いのがたれ下り、一層深山の気分をもりたている。

12時10分、登ってきた道をひきかえし、13時10分事務所前につく。

葉の落ちた木もあるが、残っている木々は、急斜面の山肌を1本々々違った色に紅葉して埋めている。所々にスギの黒い緑がまざり附近の紅葉をさらにひきたてている。そこに日が当るとその斜面はまぶしい程の色となって輝く。

事務所近くまでおりてきて右岸を進んでいた時、誰かが「コヤスノキがある。それ、あの葉の形なら絶対そうだ」と言いはる。ここにそんなものがある筈がない。もしあれば大発見だ。ともかく実物を取ってみようというので、大きな岩のゴロゴロした川原に下り対岸に行ったら、なんだ、ヒメアオキだった。

13時30分音水口につく。この谷は、音水本谷ともいい大正の初期に一度伐採したらしいが、最近、奥の方の伐採計画が出来、林道をつけ開発が進むとのことである。

藤本、岩本先生の運転する車に分乗し、赤西の谷、伊和神社社叢をみてかえる。

奥谷国有林概説

奥谷国有林に宍粟郡波賀町にある。波賀町は、播磨国宍粟郡の最北部に位置し、東及び南は同郡一宮町、山崎町に接し、西は千種町に連なり、北は戸倉トンネルにより鳥取県に通じ、また養父郡大屋町にも接している。旧西谷村、奥谷村よりなる。

奥谷国有林は、揖保川の水源地の旧奥谷村にあって、海抜千メートル内外の山々に囲まれた渓谷地帯で、1万2千町歩の広大な面積をしめ、その中に、赤西、音水の谷をはじめ多くの谷を含んでいる。

また、近くに揖保川の上流の引原川を巨大な引原ダムでせきとめた人工湖―音水湖があり、戸倉、道谷、水の山のスキー場もあり、これらとあわせて、県立自然公園に指定されている。

国有林の林況については、山崎営林署の管内概要（昭和38年8月）に次のように出ている。

森林植物帯上、水平的には暖帯北部、垂直的には暖帯上部から温帯下部に属し、大部分が海抜600～1,500メートルの間に位置し、いわゆるブナ帯に属している。

このうち、海抜600～800メートル附近は、モミ、ツガを主体に、スギ、ブナ、クリ、ミズナラ等落葉広葉樹を混交した林齢100～150年生の林で、ha当り蓄積300m³程度。

海抜800～1,000メートル附近は伏条性スギを主体として僅かにブナ、ミズナラ、ミズメ等の広葉樹を混交する林齢200年生前後の林で、ha当り蓄積350～500m³を有す

る。

1,000〜1,200メートル付近は、ブナを主体とし、ミズナラ、ミズメ、イタヤカエデ等を混交する林で、林齢80〜120年生で、ha当り200〜250m³程度の蓄積を有している。

1,200メートル以上になると、ブナ、ミズメ、ミズナラ等は次第に疎開して、ネマガリダケの侵入が多くなり、遂には笹生地となっている。

この外、人工林の植栽木の大部分はスギ、ヒノキで、一部カラマツ、ケヤキ、クリが植栽されている。

この地の植物相について田代善太郎氏は、近畿に続く播磨の西北部に位し、また、中国背梁山脈の一部をなしているので、固有日本共通の北系要素、日本南部の普遍的要素、暖地性北進植物の外、近畿を中心とする地域の要素や日本海要素、日本北部植物小区系と分布上の連絡を有する特殊植物がある等、分布の状態は非常に多様な所であるとのべられているが、その上、県内で最も広い原始林として保護されてきたので、県下主要植物採集地として是非一度は行くべき所であろう。

引原川より西へ入る谷のうち、南からみて、寒霞渓、赤西、中音水、奥音水等がよく知られているが、東へ入るマンガ谷はあまり知られていない。

寒霞渓国有林には原部落より入るが、約2キロメートル入った所に不動の滝とよばれる滝がある。上滝、大滝夫婦滝と3段あり、そのうち大滝は約40メートルの高さがある。また尾根筋まで林道が通じており、そこからの展望はよい。この谷をつめると約8キロメートル、1時間半で千種町河内に出られる。

赤西の谷は10数キロにも及ぶ深い谷で、赤西口から約8キロメートル近く入ると営林署の事務所、宿舎等があり、さらに奥へ約3キロメートルも入れる。谷の北斜面は伐採されたが、南斜面は原始林が残されている。中音水の谷へは約2時間でぬけられる。

音水口より入った音水部落の奥、営林署より軌道に沿って下の方へゆけば赤西口に、上の方へ行けば中音水の谷に、川に沿った道を進めば奥音水の谷に入る。中音水の谷は伐採され植林中である。奥音水をつめると戸倉峠へ行けるが登山家向のコースであろう。

マンガ谷へは日原より入るが、無名の大きな滝がある。

交通・宿泊設備

奥谷へは山崎町からバスが出ている。姫路から山崎までは神姫バスが20分毎に出ている。（約1時間10分乃至30分130円）

山崎からは、神姫、日の丸バスの戸倉（とくら）、または若桜（わかさ）行にのり、寒霞渓へは原、赤西へは赤西口、中音水、奥音水へは音水口でそれぞれ下車。（山崎から約1時間半、160円）

鳥取からもバスで約1時間半、100円で引原ダムまで来られる。

寒霞渓は約2キロメートル、赤西の谷は約9キロメートルばかり乗用車が入れる。いずれも原部落より橋を渡り、寒霞渓へは支流に沿い、赤西へは引原川に沿い右岸を行けばよい。

赤西、音水には山崎営林署の宿泊所がある。音水湖畔引原には、ユースホステル長源寺及び2軒の旅館がある。

ずっと奥の戸倉部落には戸倉山荘の外、スキー宿が沢山ある。道谷、鹿伏の部落にもスキー宿が多い。

文　　献

兵庫県博物学会会誌第3号は、1931年8月17〜19日、田代善太郎氏の指導で行なった奥谷採集会の記念号で、次のとおり奥谷関係の記事が多い。1932年発行

中山発郎：奥谷国有林に就て　p.10〜p.16

筆者は当時の山崎営林署長で、宍粟杉の特徴等について記している。

佐藤茂樹：奥谷国有林における動物管見　p.39〜p.41

採集会当日にみた鞘翅目、鱗翅目その他の記録

陸井初治：奥谷を語る　p.61〜p.72

奥谷採集会の記録及び参加者名や熊杉等、杉の話が記載されている。

中原辰男：奥谷採集会に参加して　p.56〜p.58

会務雑報　p.113

採集会の記録

奥谷国有林採集植物目録　p.89〜p.95

97科448種の植物が記載されている。

田代善太郎：奥谷村国有林植物概説　p.17〜.23p

南系植物要素として普通にみられるヤブツバキ、アラカシ、シイ、アベマキ、ナラガシワ、ノグルミ、カゴノキ、ナナメノキ、タマミズキ、クロバイ、シャシャンボ、リンボク、カナメモチ、ゴンズイ、ヤマガキ、ヤマハゼ、ヒイラギ、ネズミモチ、イソノキ、ネコノチチ、ナンテン、ビロウドイチゴ、イタビカズラ、カワラハンノキ、アサガラ、サカキ、白花ウンゼンツツジ、モチツツジ、キシツツジ、カクミノスノキ、シシラン、西国ベニシダ、イワヒメワラビ、スリトラノヲ、ツルデンダ、ヒトツバが当地で見られぬこと。また注目すべき要素として、ヤマザクラ、エドヒガン、オオイタヤメイゲツ、ヒナウチハカエデ、オオモミジ、カラスザンシヨウ、ユクノキ、ヒトツバハギ、ダイセンヤナギ、ヤマフジ、ミカエリソウ、コハクウンボク、ハルトラノヲ、タイミンガサ、フジシダ、ヒメサジラン、コバノイシカグマをあげている。外帯地方に分布する要素ヒメシヤラ、ドウダンツツジ、ケサンカクズ

〔以下 p. 209へ〕

〔p.241より〕

ル、クサヤツデ、オオモミジガサ、オオコケシノブが見られないこと。北系植物要素ブナノキ、イヌブナ、ミズナラ、アサダ、サワシバ、ツノハシバミ、アサノハカエデ、ヒメモチ、ハコヤナギ、オノエヤナギ、クロソヨゴ、サラサドウダン、タニウツギ、コアジサイ、ヤマソテツ、ミヤマベニシダをあげ、シラネワラビがみられないこと。日本海側植物として、クマスギ、ネマガリダケ、ムラサキマユミ、ヒメモチ、ツシマナナカマド、オクノカンスゲがみられるが、オオコメツツジ、ミヤマクマヤナギ、ヒウガミズキ、キンキマメザクラ、クロバナヒキオコシ、モミジチヤルメルソウ、イタチササゲが見られないことが書いてある。

室井　綽：播磨植物目録（補遺その一）
県博物学会誌11号（1936年）

ミヤマシケシダ、コミネカエデ、ネコノチチ、フウリンウメモドキ、オオタチツボスミレ、カメバソウ、エダウチネズミガヤ、ハジカエリ、ホクエツササ、ミタケササを奥谷産として追加。

貴田武捷：奥谷の菌類採集記　博会誌 13号（1938年）

1936年10月16～18日、赤西、音水における川村清一博士指導によるキノコの採集会記録。

建部恵潤：宍粟郡産植物報告　博会誌 14号（1938年）

さきに発行された播磨植物目録の追加として、イワイタチシダ、クラガリシダ、ヤマエンゴサク、シロネコノメソウ、チユウゴクキハダ、ウゴザサ、オオバウラジロシノ、ヒロシマシノ、オタキザサが奥谷に産することの報告。

山鳥吉五郎：赤西国有林植物採集記
県博物学雑誌　8・9合併号（1943年）

8月10日・11日赤西における小泉源一博士指導による植物採集記録及び植物目録。

目録には93科355種の植物が記載されている。

建部恵潤：播磨国宍粟郡植物目録第一輯
植物趣味25号（1938年）

稲田又男・建部恵潤：宍粟郡音水、赤西両国有林の羊歯類、兵庫生物Ⅱ p.145～p.147

稲田又男：兵庫県羊歯おぼえ書(2)
兵庫生物Ⅱ　p.98～p.100

建部恵潤：兵庫県産蘚苔類雑記(1)
兵庫生物Ⅱ　p.200～p.203

田代善太郎：兵庫県内植物採集日誌
兵庫生物Ⅱ　p.69～p.71

三木順一：波賀町不動の滝にシコクススミレをたずねて　兵庫生物Ⅲ　p.385

建部恵潤・内海功一：兵庫県宍粟郡奥谷村春の植物相
兵庫生物Ⅲ　p.7～p.8

室井綽・岡村はた：兵庫県植物分布概観
兵庫生物Ⅳ　p.1～p.9

単行本

兵庫県博物学会：播磨植物目録（1935年）

稲田又男：兵庫県羊歯植物誌（1958年）

著者は音水、赤西両国有林で76種のシダ植物を記録したと発表されている。

兵庫県生物学会：兵庫の自然
のじぎく文庫　1960年　p.118～p.119

筆者は内海功一・中西哲の両氏でコケについて半頁記載してある。

地図　5万分の1　大屋市場